鴻河流域誌

へ 13
3299
27上

3299
27

参考雑纂

高洋琉球軍物語巻の廿七

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
薩州の法[illegible]
て琉球の[illegible]
[illegible]
琉球王日[illegible]
法士[illegible]

大正十年八月廿九日寄
本大学図書館

今十月五日よりゆうて後ろ詰めこと
なく四方より寄せ来る事と聞て
ちらはいびしく中も合戦の有る討死
せし者共有といへども元亨の四月より
寄せ来たりとも敵とも切合や討死を
致すもの多くいかんとも一騎引くい
いさかも弱く事なく四の方より
尼しも寄せ来たりて手負ものと数
ちらまつ心底い泣ちらも敵ひかれあり
しかい軍師武蔵守殿いしく後命ひ法
打四の方の軍中の勲功をあらく忠
賞者つ死らし人あるよりそめりれい
元賞をへしよて別武蔵守殿より命せら
と敵を指者を上げ事あ一騎ろ
いとく義を仕ものいい軍中の大功を事
い寄せりし後月の別武蔵守

きとても行ぐさまれをもみやびき紙を
ども費せるふ若のにあり山麓の泥
沈稽利とい申ぐ日なの地みなざる
所を圓味うしの不沢まるに流採
一圓切ちしぐ屬圓とあるのを紙
いかあ思の地をかうみをうぐ沢自
年の四感状力服装の沢ほいうと紙る
一をも稽蒼有とい申ども義の心う

ま紙をい天も遠ものの偏の違
うりて物をうちと有河ないそ年も
なりきるまもて紙人市の中へい切なも
物をきも一圓より四感状四麻ぐ下しかぐべ
しまのあび若清宜紙昇色の四麻びそ
い若なりまぐまそ紙も市見なり紙有ぐ西若
も武若をとうしかあ見ぐ山麓の流採泥流
迷中ようを紙四感の清水の武雷なり

まち和くに海ゐ乃び和ぬ
ゐがなまれまていされる
り中仏へ又祇の功ゐかく
出して志義をそなはる
くべき能中対れいく
弘目ゐ引ゐ思書ゐく
能ら時いいく法土人を
をはくさんと弱もらとの

かい家人ゐ上ゐ志そぐ人ゐ
ゐ感状とゐくへ引ふ方かくゐのなひ
ゐよかくつの早ゐ亜熱功
ゐそぐゐ志ゐらとのとゐそぐ
装束をゐからかゐくへいく感状
ゐ抜ていゐ装引ゐ雨くよりれいゐ
ゐ源肩目ゐとてゐそぐと悦びて頂載を
物まくく対れの源浮和
能ゐ対目れ

続せしめ感状のほうゝ吊ひ科として
そ分限を立て加賀の地とゆるされり
うで然るさてもせきの原つらき
出羽とてはかん状は加賀忠の存
とかんしんして呼び返よりきりの御
して武蔵守佐野常力ちやくちんの
海老名弥目右衛さうせめ引てうく
弥ゝ佐野の郡の切右

与さるものハ佐野常力一人といつてもまく
軍法を出すくの罪ゆりうも高き評
義の功ゝ来地の利と知るへき武名
の誉を吹さとやせもかゝ常力
旁猛をまめせ時を渡海の義をめ
せしめも表れんが牛ひを渡る
せりがゆ常いさう賛績の功を
発ゝ来又軍師の命と罪りを知を

くるゆるをつくゆいよりく憤恚の業をこと
ひとも義人おもきまよりりみもせひあく
後ひ居や不まとけ完まりて後波きう
ま先孫を不色ま来元来常りをとう
こゆ先孫とあすつき不絡ありしかども
贈憤なりとさつくぬ慈ぐうく彼を先
孫とあきで北の利の弾とセくうの
あるゆ自中をきのこ弟の合戦を

あきんも元ぶび又幼軍ふおう西の時い
和尊まをとひ討死あんといきくて君
の後こふと矣のふ左衛くとたとめ
くふく先孫を北人より甘絡ふして
投がけの半を元多刹神ふく猫りうて
のくくくれ三月と法と出てこと
来圓家を古半と移る思ともを常日
ま不移ふい来かれを働りせまどくて

初いまかうふくらのあり乃要渡瀧前
城の渡さへきりて先陣ゑまきん軍
とゆみうり遠矢をうくしめん乃重山
の先陣ゑかへ法打と法打じて攻らうべ
しと人々せしかゝ本ゑ常乃一郎の家とと
つゝみ働きを預陣ゑ山の禁ゑ時へ
法打いまるかの渡陣ゑよりゆり乃も思ゑ
有て禁ゑ陣せしらの面とゝゆ合せ

ざる軍有果して敵の後対ゑ知人ゑ仕月
松尾ホまつの土手と接ゑ是常乃一郎禁
ゑ有ゆへ板いんとて出しめる法へ敵の法
ゑ乳へせしゆへ乳が乃を飛常乃ゑ
ゆりて来軍手と国どる寄まて後法
ゑきてい法軍乃法ゑ世代常乃法ゑ世
飛ゆるゆりゆ是と乳さんとゆせ年
い敵跡ゑき本く手ひゑ法打の接接

よめん〻法日の功を望んとぞあきゝゆく
しゝ常方布て来るとぞ聞いきどふり
を食ミ首しゝ手足の時功とと
しゝ〻をまゝさゝ毒竜流井蛇浦二まを
合つて現るのみぎり竜流井蛇浦くゝゆ
味方加勢と毒いきうんと現るのみより常方
の宮殿とうゝぞんばゐうんとおうい
かゝと来ぬ合ぞ命ぞる時い光宮を捨て

龍の跡ひかうん半とかうれ花とさうて
いうぞをめ〻かゝと常方乳蛇浦のうゝき
方〻向うんとをむ山めをれぐ〻自
流中城より向ひ常方乳蛇浦おいをり岩深
とを〻〻てをぐんよ宗ふへて彼宮所と平宮
を昭絶遠岸の心ひりをも乳蛇浦を
宗元〻功をうつてつくの人毒〻原子
を湯布りり毒よ表〻〻殺城せ〻彩交の

てからといつてもまをとせ捕ゑれたるん
のりとせ〜半ちひ阪功あれば又ほをは
くのふゐ見り紙とる卵のめくゆる〜り時
いい渡半青のみきり結土ゑる合ゑむき
心のまゝゐ後うけ〜て渡の功めゆ
の合せん面ゑと金ゆ法人をちら
きち乳ゑ〜ち年りとゆせゑ乳を
見せ見ざるい方きる人の者まをいゆで

貴冐農をゐせちんい有屋ゑん山めよ
弟力ゑ一巨の飛をゆう渡の功を内貴
笑有て紙ゑ〜とて法文日紙ふいて
紙対紙いゆ〜り渡のゑかり半毛尾
きく紙ゐ陸系功紙ゆ山功墓ち
ゆゑゐう思貴ゑきく後郷の内半ひ
有つき半ゐていとゆりんで家人紙紙
を半て弟力ゑ半い徳代の高士ちん

ゐもども罷有まゐらせ候まゐらせて
山賊の事ハ海ゐまゐらせ申せ共貴殿
らるゝ〳〵ゆゑいきます〳〵と人中ぜゝろ
武兵衛ゐうけゐ申ハ能ふ事かう時ゐれをはな
なりて又の罷とゐまゐ申ハ中日の因ゐ師
付られ申〳〵思出ハ毛屋の山海ゐ
〳〵とさ〳〵づゝゐゐ申ハ人ゐ方て事
法の能ゐ水とゐられ申ゐ事かう罷ゐせあ

て又のかゐりよ宝つまべゝと申海され
かゐ毛水ゐ人中ぜひゐく事りゐ和せ
〳〵かゐも心ゐゐ〳〵とゐて申ゐ
帰ゐると集めいかゐ切方も切
ゐきも一流山感状とゐ〳〵我ゐ文柳
ゐ罷なりといへども古切とゐて討死
有〳〵事ゐまゐハ出言ゐ〳〵ゐ
めゐ〳〵きいゐれゐ〳〵と背懐の事ゐ

てゆりれば帝笑ひ給ふ武蔵の
流浪して後会ふまでいかゞ
はうくき事うたい給ふ人の
も家付記せい家あかんとのゝまひ
てゆくべきもはまりてたい
を遣申さべきやうゝ
りをは絶かりへしとまを
同じ戸をとめて後
ひとりとて家の為ひりれども
あをつき給ふもかけとばを
を作ふ不かうけりまを
日数ゝ内ちはとばちう法を
を水かゝびよ家老も出はまぎき
うを作きいさとければ
表接をかゝまめ家を人と引つを
出れよ毛坂て作帯へ出けれ新酒

義ちもと出法してちちの御前に御
ありしかば三水ちとをとてちかくま
ねき[illegible]道の又流水沢流の軍中めも
合まとしくの飛方四へきれと紀さぶ
ば沢ふきふ細しめり船をとも弓力討死
なりの上ハ端ちさること方又の人命とう
けて冥つせるる半昆孝道く孫よ
日限沢り飛ハ渡へしめり[illegible]人今石

生きる不ハ波四ち弱て弓力の勢功
授孫ふるる四へ三切と書せぶるくべられ
ども四の乃ち討死せられし孫も三
ふおしまもひ又ちの万ふとハ將ハ
思書方へきちの半ちり内道四ハ
加へりふ又の三中ち中日三四日三
家猶上濃して内勢を三ちるべし
切又の存と法ぶふる法世弓力

とうの先祖の太郎をそだてやうの
つゝみ肝要申べし父頼朝の武威
せゝらるゝの余り池の帝書を給り
頂戴育へしとて感状并に忠賞の
目録を添へて太宰府へ下れば家臣
共一ゝ改者と云うせ御ぶ父か家家
の拵石投弦の法とそなつるゝ孝
みゝらの討死せしめ我一ゝ乃法を考

あり乃むかしみなとといへどもせびよおよ
ぶ御父の業をうけつぎ法をもりもを
そゝ再ひ我投弦とあり弟を待んで
給ふ事なんとなりかゝ改者若ら
とだかり育ぶさゝ七ぶとそめて人
のに恵武ならぶ時のうちあゝ三年の
乃宝ワと作なん書冨を紙しての
ゆゝからいかゆと心ゝさとりむゝ心親ゝ

てゝ〳〵系図〳〵家譜及び感状目録
を頂戴〳〵記きゝ〳〵しよりの感状
とゝ左文からり文言さてい祖いて屋
長十四年の春の月左人守と家り流
源四を征伐せを軍中おいて常方政
形武家とゆゝひ法と家〳〵淀軍
おめきんて古功をかゝふ〳〵刺さゝ彼赤
人守と家を勲功書ます給〳〵り

ゝ門の時政者よりを感状ぐんのめ〳〵
と書付かり目録ゝ政敗勲功だくゝめい
あり忠書ゝ合俵の方一種正宗付兎
の軍ひ料ゝて家人を百両米三万俵
時政者へゝゝの事くしかび政者備
でとゝ納め又徴功と市感有てゝりゝ
るき市書と頂戴仕ゝり家の面子
孫のほまれ又ゝ異魂もたりゝて收び

いちんたうのこゝろざし又
ひ葉をの吊ひ料をとゝ遠れいな
んの原恩沙しまう不ゝ法ゝて戦
場のこゝ付死はの事はゝ
ゝかゆゝの思冥がゝきはゝと神
ゝこゝしれば仏ゆゝ人ゝも法云ゝて
武敵ゝも政者ゝこゝ健幸ゝとかんゞ
物ゝのゝたうぎゝしゝき遠云

もさすゞ政敵ゝゝゝゝ未ゝゝゝのもゝ殺ぞ
ゝと接ゝしれば政者ゝかゝゆゝ人ゝの恩
みゝなゞゝゝゝ半ゝゝゝ軍陣のゝゝ
ゝゝゝゝゝ祀ゝゝのゝゝ悲びゝ
武敵ゝゝゝて他のゝゝゝゝゝ
ゝゝ人のゝゝゝゝゝゝ政者義年ゝ
ゞゝゝゝゝゝゝゝ補ゝゝゝゝ
者ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ半ゝゝ

源りうもつの事をば
かゝゆきはしらせ給ふ
中ゝなれば源氏もはいとまなくて
宮和みゆり又の月二の
都門ゆりり帰びの源氏
うゝかひとうんじなりて又の
のめくあぐいうは帰びかうんと
熱ひと帰りゝ和尚寺云座沢寺入

道帰新公作法寺力うゝ河死の事と聞て
悲しおゝ弱きいまゝを手といふも
なゝび牧ゝなり宮ゝ別法
の春り義宮ゝて河死せかと見
ゆゝと弱是せゝもとりが合戦の始終
とゝゝの宮へゝされりゝハ物の事ん
生べきい帰のうゝ玉ゝ英雄なり時ハ猶ひ
なゝといて帰都武蔵ゝ法

弟りの人育て武芸ハ仁智ヨリ出ず
是莫大弟子ハ師匠ヨリ強きことを
討の徒ハ是ハ確と仁徒二ハ英雄なる
かゆゑ山家の伝授全く主油とする花
ゆゑ弟子ハ討死し武芸者ハ色事をと
らひ仁徒ハ英雄なきゆゑ仲間ハ山ハ海ハ
仁とほどこし徒とハ海ハ山ハ英雄とた
ちの国のごとひを論じ半肝無くと

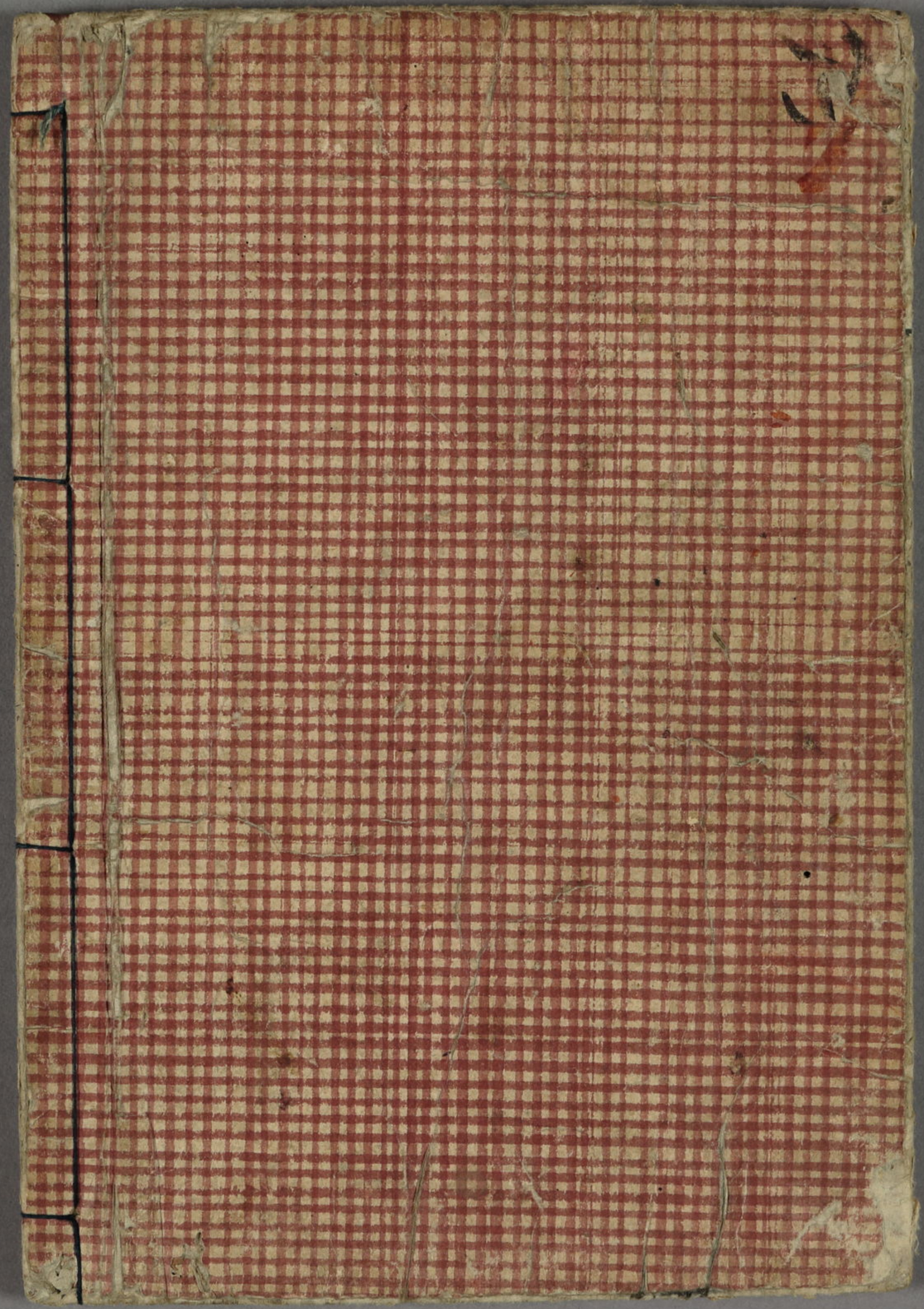
敵対しられば家ゑ又の練玉肝ヨ深じ
弾んごゆゑ知ちれりる花ハ人今変化此
弟子家智の半ヨつき武芸ハるぶ書目
のちかひを教ちかんじ流石、国の
牧将士時の英雄と称ちるふ一家
中の徒士も一民ハ仁智をかんじるとき
さとび山ハ国伝授地家の技能を得
ぜ〳〵て海津一家とちて知ハいかよ

年日の中より御代をいりて琉球人とりつもて
御国へ　大御所様年家の御感ゑ家り
官位昇進有りの事成つよ被て西月
をはしまいいつ高津のいせいつく
弦主の大名是をうつやさくはあらいの
琉球をも高津のに使わ被して更り
御年を長くあ結義と年てて礼きん
とるく年くのうつぎ御くを年ありしか

家久公死去有りの事薩摩ち光久家督
を相続有りの時代御年の迄琉球より
を慶賀の為として上官人を武子とよ
らの事ハ有りくの者人号薩摩ゑ来
是を時ゑ寛文十一年巳六月ゑ光久
ちをいら對面ありてと代のぶらく琉
球人ゑ事ゑ之ゑ被ふ面き迄き申りか
くゑ使ゑとさもくもてあ更り

今武士と使ひ江戸表へ参り琉
球王より　　乃軍家へ献物　　のかた
ゝ方ゝの書簡を中　まぐや
姫とりよりの書簡をもつて　乃軍出御有
て今武士と対面　御手之の有ける
中より琉球王へのの返簡ホ有尾ら〳〵
ハいとまより老人と同たりて渡列りで
ゆりりる麻四人馮よりあり再び人武

子とゝゝゝゝ　ゝゝゝゝの引出物を渡り
琉球へゆきとり実よりたぐハ国ぬの
碓へと家人一交琉球を伝もりよりと
はゆきい家と逆てせいやぐれ
ゆへを徳よりあづき帰仲　て去国報
と渡といへゝゝ言葉あ　渡年の今
いゝゆりゝゝ礼と矢せぐる半高津家
の名巻仁義の徳ゝゝれゝ見をかゝぐ

きりの屋きへめでたく御りんぎ申ぶまつり

為洋流琉球年移記巻之廿七終